

# St. Luke's International University Repository

## A Study on Health Administration for Nursing Students at St.Luke's College of Nursing - On a Point of Self-Growth-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中山, 久子, 飯田, 澄美子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10285/264">http://hdl.handle.net/10285/264</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 単科大学における看護学生の健康管理に関する研究 ——自己の成長に向けて——

中山久子\*, 飯田澄美子\*\*

## 要 旨

入学時のオリエンテーションで行なわれた性格テストが、本学看護学生の学生生活における自己の成長にどのような影響を与えているか、また、本学看護学生の入学年度集団による特性の相違を明らかにすることを目的として、本学1986年入学生と1987年入学生を対象に1年入学時と4年卒業時に実施したTAOK (Transactional Analysis and OK positions), YGテスト (矢田部ギルフォード性格テスト)の結果と、自己の成長との関連を検討した。また、1987年入学生には3年次にも同様な調査を行ない、その効果について検討した。その結果は以下のごとくであった。

1. TAOKによるエゴグラム・「基本的構え」及びYGテストの結果は、集団の特性を反映している。
2. 3年次にもテスト及び調査を行なうことは、学生自身が自己を見つめる機会となる。
3. 1986年入学生と比較して、1987年入学生では、学外活動や自主性を重んじられる卒業論文などの要因が、自己の成長に影響を与えたと認識した者が多い。
4. 1987年入学生の3年次と比較して、4年次では、学外活動や大学4年間を通しての経験が、自己の成長に影響を与えたと捉えている者の割合が2倍に増加している。
5. 1986年入学生では、4年次には「基本的構え」の自他肯定している者、1987年入学生では、3年次には自他肯定している者、4年次では自己否定・他者肯定している者に、過去の経験を自己の成長に結びつけている割合が多い。
6. 1987年入学生では、「自分がプラスに変化したことから」について、3年次から4年次の間に、「物事をさまざまな側面から捉えられるようになった」と答えた者の割合が2倍に増加している。

## キーワードズ

少人数教育      健康管理      心の健康      交流分析      青年期      自己の成長

## I. はじめに

本学では、健康に関わる専門職として幅広く活躍できる人材を育成している。学生は専門職を目指すものとして健康に関する知識・技術を身につけることは大切であるが、さらに人間を対象とする援助者として人間を総合的に見る眼を養うことが望まれる。そのためには、自己理解ができ、自己成長することは欠かすこ

とができない条件である。在学中にこのような意識を自らが持つことは、極めて大切なことと考えられる。また青年期であるこの時期は、他者との関わりを通して自分がどのような人間であるかを模索し、さまざまな課題を達成しながら成長していく過程でもある。

本学の入学時の健康管理オリエンテーションは、身体的な健康調査とあわせて、自己の性格、およびこれからの大学生活での生き方を含めた自己の具体的な成長目標の記述を求めている。また、水野らの考案したTAOKと矢田部ギルフォード性格テスト(以下YGテストと略す)を行ない、その後個別面接の際、これら

\* 聖路加看護大学健康管理部

\*\* 聖路加看護大学教授

の結果の説明を、入学時に抱いた身体面あるいは精神面の不安に対する相談あるいはこれからの大学生活についてのアドバイスとあわせて行なっている。

本研究では、本学1986年入学生を対象とし、1年の入学時と4年の卒業時に、同様の調査を行ない、入学時のオリエンテーションで行なわれた性格テストが、その後の大学生活における自己の成長にどのような影響を与えているのかを明らかにすることを目的として研究を進めた。また、本学看護学生の入学年度集団特性の相違を明らかにするために1987年入学生についても、1年次と4年次に同様のテストと調査を行ない、これらの結果を1986年入学生の結果と比較した。さらに、1987年入学生には、3年次にも同様なテストと調査を行ない、その効果について比較検討した。

## II. 対象及び研究方法

対象は、1986年入学生においては1年次、4年次とも同一の45名を対象とし、1987年入学生においては1年次51名、3年次46名、4年次51名を対象とした。両入学年度集団とも1年次は、健康管理オリエンテーション参加者全員に、他の学年次は希望者にのみ、テスト用紙、調査用紙を配布し、実施した。

調査内容は、1年入学時は①TAOK、②YGテスト、それらに加えて、3年次、4年次は③自由記述形式で入学してから現在までに、「自分はどのようなことでどう変化したと思うか」、「何が自分の成長の動機になったか」、「TAOKはどのように役立ったか」、について記入を求めた。

調査時期は、1986年入学生においては、1年次は入学直後の4月中旬、4年次は1月中旬であり、1987年入学生においては、1年次は入学直後の4月中旬、3年次は2月下旬、4年次は1月下旬であった。

なお、本研究で用いたTAOK (Transactional Analysis and OK positions) は、交流分析 (Transactional Analysis) の考え方に基いて作られた検査である。交流分析は自分の性格上の問題点を自己分析によって気づき、他者との人間関係を自分でうまくコントロールできるように学習していく方法である。交流分析では、人間は「親」「成人」「子ども」という3つの自分を持つとしており、それらを自我状態と呼んでいる。「親」の自我状態Pの部分はCP (Critical Parent=父性的な親、批判的な親) とNP (Nurturing Parent=母性的な親、保護的な親) に分けられ、「成人」の自我状態はA (Adult=事実に基づいて決断する働き)、「子ども」の自我状態CはFC (Free Child=自由な子ども) とAC (Adapted Child=順応する子ども) に分けられる。そして、自分の中の自我状態がどのようになっているかを客観的に知る方法と

してエゴグラムがある。また一方、交流分析では、幼児期に親とのふれあいが主体になって培われた人間と人生に対する態度を、その人の「基本的構え」と呼び、人間は成長発達の段階で以下の4つの「基本的構え」のうちの1つを身につけていると考えている。4つの「基本的構え」とは、1. 私はOK、あなたもOK (自己肯定)、2. 私はOK、あなたはOKではない (自己肯定、他者否定)、3. 私はOKではない、あなたはOK (自己否定、他者肯定)、4. 私はOKではない、あなたもOKではない (他者否定)、である。そしてTAOKは、エゴグラムと「基本的構え」という2つの面から総合的に人間を捉えることによって、よりよい人間関係を営むために具体的に自分のどこをどのように変えていくのがよいのかを知る手がかりとなる。

本研究では、入学時のオリエンテーション、性格テスト、あるいは個別面接が、その後の大学生活に与える影響を見るために、主としてTAOKの結果を中心に分析を行なった。

TAOK、YGテストおよび自己成長などに関する自由記述の内容について、入学年度別に集計すると共に、さらに「基本的構え」の1年次から4年次への変化のパターンを基準として、対象者を7グループに分類し、自己の成長に影響を与えた動機づけの数との関連について比較検討した。さらに、1987年入学生については、質問紙調査に含まれる「自分がどのようなことでどう変化したか。」の問いに対する自由記述の結果をKJ法を用いて分類し、自分がプラスあるいはマイナスに変化したと認識したことがらをまとめた。

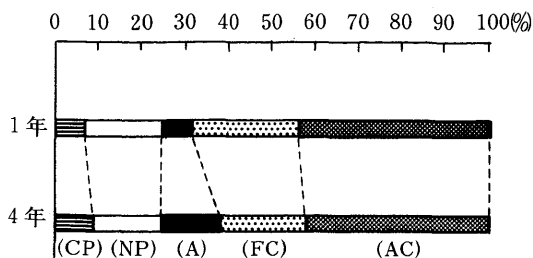
## III. 結果

### 1. エゴグラム最高値割合

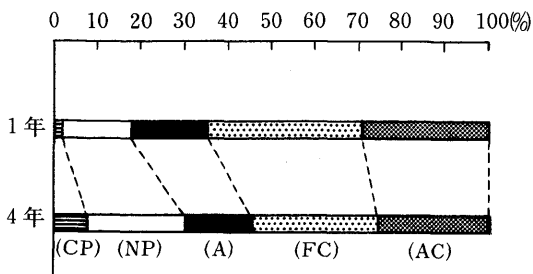
TAOKの結果得られたエゴグラムの一番高い部分の割合は図1のごとくで、1987年入学生では、51名のうちFCが1年次18名 (35.3%) 4年次15名 (29.4%) とともにFCが最高値である者の割合が多くなっている。それに比べ、1986年入学生では、45名のうちACが1年次20名 (44.4%) 4年次19名 (42.2%) といずれもACが最高値である者の割合が多く、それぞれの入学年度集団の特性が表われている。また、1年次から4年次の最高値割合の変化は、1987年入学生ではCPが2.0%から7.8%、NPが15.7%から21.6%と増加しているのに対し、1986年入学生ではAが6.7%から13.3%に増加しており、変化の状態も入学年度集団が異なることによって、相違があることが明らかである。

### 2. 「基本的構え」による割合

TAOKの結果、得られた「基本的構え」の割合は表



【1986年入学生】



【1987年入学生】

図1 エゴグラム最高値割合

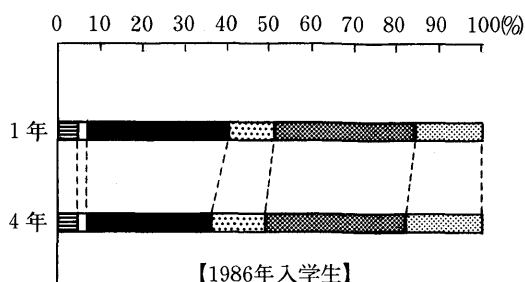
1のごとくで、1986年入学生と1987年入学生とを比較すると、1年次の「基本的構え」では自他肯定のものが前者では13名(28.9%)に比べて、後者では22名(43.1%)とやや多く、自他否定のものが前者では13名(28.9%)に対し、後者では8名(15.7%)と少ない。4年次の「基本的構え」では、1年次同様、自他肯定が前者では14名(31.1%)であるのに比べて、後者では23名(45.1%)と多い。これらのことから「基本的構え」の割合は、1年次、4年次ともに、入学年度集団によって異なる傾向にあるといえる。

### 3. YG テスト結果の学年比較

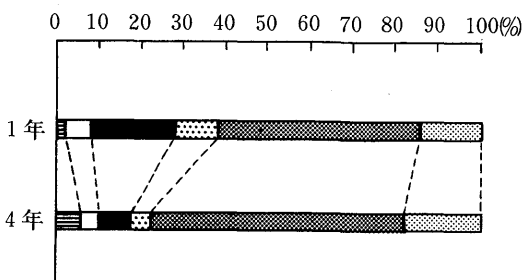
YG テスト結果を学年次別に比較したものは図2のごとくで、1986年入学生では、リーダ型D型、平均型のA型が1年次、4年次とも約3割を占めている。それに対して、1987年入学生では、リーダ型のD型が1年次より24名(48.0%)と約半数を占めており、1年次から4年次への変化を見ると、A型が減少し、D型が増加している。1986年入学生と1987年入学生とを比較すると4年次では、前者に比べて後者はA型の割合が5%水準で有意に少なく、D型の割合が有意に多くなっており、後者は安定積極型傾向の集団であるといえる。

### 4. エゴグラムに対する意識

図3に示したエゴグラムに対する意識とは、対象者がこれまでに受けたTAOKの結果で知った自分のエ



【1986年入学生】



【1987年入学生】

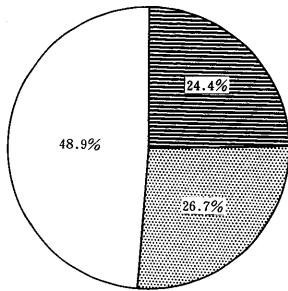
■E型 □C型 ■A型 ▨B型 ▩D型 ▧その他

図2 YGテスト結果の学年次比較

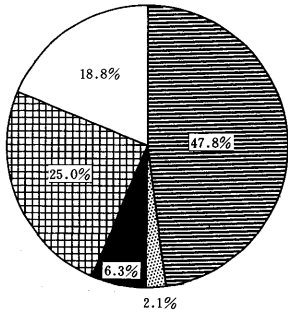
ゴグラムをどのように意識したかを表わしている。1987年入学生では、4年次に自己概念の変容や視野の広がりなどの変化があり、エゴグラムが役だったとする者が23名(47.8%)、参考になった者が1名(2.1%)で何らかの意味で役立っている者が約半数見られた。1986年入学生でも、4年次に役立った者、参考になった者が合わせて約半数見られた。しかし、「忘れた」と答えた者の割合が1986年入学生の4年次に半数見られたのに対し、1987年入学生では18.8%と少なかった。1986年入学生の4年次で「忘れた」と答えた者の割合は、1987年入学生の3年次の割合と類似している。また、1987年入学生の4年次では、「役に立たない」とする者の割合が25.0%で、「役に立った」、「参考になった」と答えた者と併せて74.9%の者がエゴグラムを含めたTAOKの内容を振り返っている。

### 5. 「基本的構え」の変化による分類

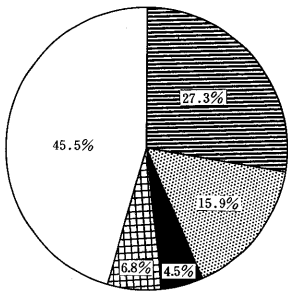
1年次から4年次にいたる「基本的構え」の変化に注目し、1986年入学生及び1987年入学生それぞれについて、AからGまでの7グループに分類した。1986年入学生の「基本的構え」の変化による分類は表2のごとくで、変化のないグループは、自他肯定のAグループ9名(20.0%)、自己肯定・他者否定のBグループ1名(2.2%)、自己否定・他者肯定のCグループ10名(22.2%)、自他否定のDグループ5名(11.1%)の計25名(55.5%)で、変化あるグループは、肯定数増加



【1986年入学生 4年次】



【1987年入学生 4年次】



【1987年入学生 3年次】

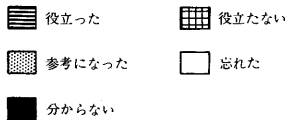


図3 エゴグラムに対する意識

のEグループ10名(22.2%), 肯定数変化なしのFグループ3名(6.6%), 肯定数減少のGグループ7名(15.5%)の計20名(44.4%)であった。一方, 1987年入学生の「基本的構え」の変化による分類は表3のごとくで, 変化のないグループは, 自己肯定のAグループ15名(29.4%), 自己肯定・他者否定のBグループ1名(2.0%), 自己否定・他者肯定のCグループ10名(19.6%), 自己否定のDグループ5名(9.8%)の

計31名(60.8%)であった。変化あるグループは, 肯定数増加のEグループ10名(19.7%), 肯定数変化なしのFグループ1名(2.0%), 肯定数減少のGグループ9名(17.6%)の計20名(39.2%)であった。1986年入学生と特に異なる傾向にあるグループはAグループで1986年入学生の9名(20.0%)に比べ, 1987年入学生は15名(29.4%)とかなり多い。

## 6. 自己成長に影響を与えた要因

### 1) 1986年入学生と1987年入学生との比較

自己成長の動機づけ要因, すなわち自己成長に影響を与えた要因を, 人間関係, 生活に関する要因, 個人的要因, 学業に関する要因の4項目について分類すると表4のごとくで, 1987年入学生において最も多いものは, 人間関係の①様々な人との出会い・関わり・話し合いで34名(66.7%), 次いで学業に関する要因の②病棟実習で変化したもの32名(62.7%), ②卒業論文14名(27.5%)であり, 上位2位までは1986年入学生と同様の傾向を示した。しかし, 1987年入学生では, 1986年入学生に比べて, ⑥課外活動(サークル・行事), ⑨学外活動(ボランティア), ⑩アルバイト, ⑪就職活動, ⑫保健所実習などの学外における活動, ⑫卒業論文, などの要因によって成長したと認識した者が多かった。また, これらの影響要因は, 自由記述の中で複数の者が自主性を重んじられる要因であると回答していた。

### 2) 1987年入学生 3年次と4年次の比較

1987年入学生の3年次と4年次において, それぞれ自己成長に影響を与えた要因を人間関係・生活に関する要因・個人的要因・学業に関する要因に分類し, これらを整理すると, 表5のごとくになる。3年次と比較して, 4年次で2倍以上の割合となっているのは, ④学外の人々との出会い・関わり, ⑫ボランティア, ⑬アルバイトなどの学外活動や, ⑦家族との関わり, ⑧大学生活, ⑨課外活動, ⑩寮・下宿・1人暮らし, ⑫勉強したことなどの大学4年間を通しての出来事, ⑫から⑰の小児や精神看護などの病棟実習である。また, 4年次で取り組む⑫卒業論文を, 自己成長に影響を与えた要因としている者が14名(27.5%)と4年次では上位3位となっている。

## 7. 「基本的構え」の肯定数変化グループ別自己成長動機づけ要因の数

### 1) 1986年入学生と1987年入学生の比較

4年間の自己成長動機づけ要因の数と「基本的構え」の肯定数変化による分類, 7グループの関連は表6のごとくで, 1986年入学生では, 自己肯定のAグループが自己成長動機づけ要因総数56件に対し, グループ人

表1 「基本的構え」による割合

	自他肯定	自己肯定 他者否定	自己否定 他者肯定	自他否定	計
1年次					
1986年入学生	13 (28.9)	6 (13.3)	13 (28.9)	13 (28.9)	45 (100.0)
1987年入学生	22 (43.1)	4 (7.8)	17 (33.3)	8 (15.7)	51 (100.0)
4年次					
1986年入学生	14 (31.1)	5 (11.1)	18 (40.0)	8 (17.8)	45 (100.0)
1987年入学生	23 (45.1)	5 (9.8)	14 (27.5)	9 (17.6)	51 (100.0)

表2 「基本的構え」の変化による分類 [1986年入学生]

4年 1年	自他肯定	自己肯定 他者否定	自己否定 他者肯定	自他否定	計
自他肯定	Aグループ 9名(20.0%)	1名(2.2%)	3名(6.7%)	Gグループ 0名	13名
自己肯定 他者否定	1名(2.2%)	Bグループ 1名(2.2%)	Fグループ 2名(4.4%)	2名(4.4%)	6名
自己否定 他者肯定	1名(2.2%)	Fグループ 1名(2.2%)	Cグループ 10名(22.2%)	1名(2.2%)	13名
自他否定	Eグループ 3名(6.7%)	2名(4.4%)	3名(6.7%)	Dグループ 5名(11.1%)	13名
計	14名	5名	18名	8名	45名

1986年入学生では自他肯定のAグループ、1987年入学生では自己否定・他者肯定のCグループが平均して最も多くのできごとを成長に結びつけているといえる。また、両者を比較すると、特に異なるグループは自己否定・他者肯定のCグループで、一人当たりの動機づけ数が1986年入学生で、3.8件/人であるのに比べて、1987年入学生では5.9件/人と多く、1987年入学生では自己否定している自分を意識し、さまざまなできごとを自己の成長に結びつけている。

2) 1987年入学生の3年次と4年次の比較

1987年入学生を「基本的構え」の変化による7グループに分類したときの成長動機づけ数の平均件数は表7のごとくで、グループ人数が0~1人のグループを除いて検討すると、3年次では自他肯定のAグループが、一人当たりの動機づけ件数が平均3.6件/人で最も多く、一方、4年次では自己否定・他者肯定のCグループが平均5.9件/人で最も多くなっている。また、3年次と4年次とを比較すると、一人当たりの動機づけ件数が最も増加したのは、肯定数増加のEグループで平均1.9件/人から平均4.8件/人と2倍以上になっており、今までの多くの経験を

表3 「基本的構え」の変化による分類 [1987年入学生]

4年 1年	自他肯定	自己肯定 他者否定	自己否定 他者肯定	自他否定	計
自他肯定	Aグループ 15名(29.4%)	3名(5.9%)	2名(3.9%)	Gグループ 2名(3.9%)	22名
自己肯定 他者否定	2名(3.9%)	Bグループ 1名(2.0%)	Fグループ 1名(2.0%)	0名	4名
自己否定 他者肯定	5名(9.8%)	Fグループ 0名	Cグループ 10名(19.6%)	2名(3.9%)	17名
自他否定	Eグループ 1名(2.0%)	1名(2.0%)	1名(2.0%)	Dグループ 5名(9.8%)	8名
計	23名	5名	14名	9名	51名

数が9人で、一人当たりの動機づけ件数が平均6.2件/人と最も多い。一方、1987年入学生では、自己否定・他者肯定のCグループが自己成長動機づけ要因総数59件に対し、グループ人数が10人で、一人当たりの動機づけ件数が平均5.9件/人と最も多くなっていた。従って

3年次から4年次に至る1年間で自己の成長に結びつけていることが分かった。次いで、自己否定・他者肯定のCグループも平均2.9件/人から平均5.9件/人と約2倍に増加しており、3年次までの経験を自己の成長に結びつけにくかったものが、Eグループと同様に

表4 自己成長に影響を与えた要因

影 響 要 因		1986年入学生 N=45(%)	1987年入学生 N=51(%)
人間関係	1 様々な人との出会い・関わり・話し合い	40 (88.9)	34 (66.7)
	2 異性とのつきあい	8 (17.8)	1 ( 2.0)
	3 教師との関わり・アドバイス	0	6 (11.8)
	4 家族との関わり	5 (11.1)	3 ( 5.9)
生活に関する要因	5 大学生活	12 (26.7)	11 (21.6)
	6 課外活動(サークル・行事)	2 ( 4.4)	7 (13.7)
	7 寮・下宿・一人暮らし	7 (15.6)	10 (19.6)
	8 日々の出来事・体験	1 ( 2.2)	5 ( 9.8)
	9 学外活動(ボランティア etc)	1 ( 2.2)	3 ( 5.9)
	10 アルバイト	3 ( 6.7)	8 (15.7)
	11 就職活動	1 ( 2.2)	6 (11.8)
個人的要因	12 自分を見つめ、考える機会があったこと	12 (26.7)	8 (15.7)
	13 様々な感情を味わったこと	0	2 ( 3.9)
	14 いろいろなことに興味を持ったこと(旅行・映画・本)	7 (15.6)	10 (19.6)
	15 信仰を持ったこと	4 ( 8.9)	0
	16 病気・けが	2 ( 4.4)	2 ( 3.9)
	17 交流分析との出会い	2 ( 4.4)	0
学業に関する要因	18 大学の授業	2 ( 4.4)	5 ( 9.8)
	19 勉強したこと(人間・看護について学んだこと)	1 ( 2.2)	8 (15.7)
	20 卒業論文	8 (17.8)	14 (27.5)
	21 様々な病棟実習	30 (66.7)	32 (62.7)
	22 保健所実習	0	6 (11.8)
	23 教育実習	1 ( 2.2)	2 ( 3.9)
	24 助産課程実習	4 ( 8.9)	5 ( 9.8)

4年次では、これまでのさまざまな経験を自己の成長に結びつけている。

## 8. 自分が変化したことから

### 1) 自分がプラスに変化したことから

1987年入学生について、「自分がどのようなことでどう変化したか。」の問いに対して、自分がプラスに変化したと認識したことがらを表8に示した。これによると3年次、4年次とも①の自分の行動・周囲の人々・信仰・看護・時間などの物事の大切さ・価値が分かった、⑦物事をプラスに捉えられるようになったと答えている者が多かった。3年次から4年次への変化を見ると、③いろいろな考え方が出来るようになった、⑤

いろいろ興味を持てるようになった、と答えた者の割合が2倍に増え、4年次では、さらに視野が広がり、物事をさまざまな側面から捉えられるようになってくる。また、⑥将来が具体化した、⑩強い自分になった、⑮自信が持てるようになったとするものが4年次に増加しており、4年次になって自己を肯定的に捉えるようになってくる。

### 2) 自分がマイナスに変化したことから

自分がマイナスに変化したと認識したことがらは表9のごとくである。また、3年次から4年次で特に変換しているものは、⑥自信が持てなくなった、⑨相手の立場にたって考えられなくなったと答えている者で、その割合は4分の1に減少している。

表5 自己成長に影響を与えた要因 [1987年入学生]

影 響 要 因		3 年次 N=46(%)	4 年次 N=51(%)
人 間 関 係	1 様々な人との出会い・関わり	23 (50.0)	20 (39.2)
	2 大学友人との関わり・記し合い	5 (10.9)	8 (15.7)
	3 実習での人々との出会い・関わり	19 (41.3)	11 (21.6)
	4 学外の人々との出会い・関わり	2 ( 4.3)	9 (17.6)
	5 異性とのつきあい	2 ( 4.3)	1 ( 2.0)
	6 教師との関わり・アドバイス	8 (17.4)	6 (11.8)
	7 家族との関わり	0	3 ( 5.9)
生 活 に 関 す る 要 因	8 大学生活	5 (10.9)	11 (21.6)
	9 課外活動 (サークル・行事)	2 ( 4.3)	7 (13.7)
	10 寮・下宿・一人暮らし	4 ( 8.7)	10 (19.6)
	11 日々の出来事・体験	4 ( 8.7)	5 ( 9.8)
	12 学外活動 (ボランティア etc)	0	3 ( 5.9)
	13 アルバイト	4 ( 8.7)	8 (15.7)
	14 就職活動	—	6 (11.8)
個 人 的 要 因	15 自分を見つめ、考える機会があったこと	13 (28.3)	8 (15.7)
	16 様々な感情を味わったこと	3 ( 6.5)	2 ( 3.9)
	17 いろいろなことに興味を持ったこと (旅行・映画・本)	7 (15.2)	10 (19.6)
	18 病気・けが	1 ( 2.2)	2 ( 3.9)
学 業 に 関 す る 要 因	19 大学の授業	4 ( 8.7)	5 ( 9.8)
	20 勉強したこと (人間・看護について学んだこと)	4 ( 8.7)	8 (15.7)
	21 卒業論文	—	14 (27.5)
	22 様々な病棟実習	22 (47.8)	10 (19.6)
	23 成人看護病棟実習	5 (10.9)	24 (47.1)
	24 小児看護病棟実習	0	8 (15.7)
	25 母性看護病棟実習	0	8 (15.7)
	26 精神看護病棟実習	1 ( 2.2)	10 (19.6)
	27 ターミナル看護病棟実習	1 ( 2.2)	10 (19.6)
	28 保健所実習	—	6 (11.8)
	29 教育実習	—	2 ( 3.9)
	30 助産課程実習	—	5 ( 9.8)

#### IV. 考察

##### 1. 入学年度別集団特性

エゴグラムは何か問題が生じたとき、直ちに反応する自我状態を知る目安となり、その一番高い部分の分

布状態で、集団全体の行動傾向をつかむことが出来る<sup>2)</sup>といわれている。

本研究で得られたエゴグラム最高値を見ると、1986年入学生では、ACが最高値をとる者の割合が、1年次、4年次ともに40%以上とかなり多い。ACはその得点が高いと自分を抑え、社会的規範に従って行動しよ



表6 「基本的構え」の肯定数変化グループ別自己成長動機づけ要因の件数

【1986年入学生】

	Aグループ	Bグループ	Cグループ	Dグループ	Eグループ	Fグループ	Gグループ
自己成長 動機づけ 要因総数 (件)	56	0	38	20	48	14	17
グループ人数(人)	9	1	10	5	10	3	7
一人当りの 動機づけ数 (件/人)	6.2	0	3.8	4.0	4.8	4.7	2.4

【1987年入学生】

	Aグループ	Bグループ	Cグループ	Dグループ	Eグループ	Fグループ	Gグループ
自己成長 動機づけ 要因総数 (件)	68	4	59	24	48	5	34
グループ人数(人)	15	1	10	5	10	1	9
一人当りの 動機づけ数 (件/人)	4.5	4.0	5.9	4.8	4.8	5.0	3.8

表7 「基本的構え」の肯定数変化グループ別自己成長動機づけ要因の件数

【1987年入学生 3年次】

	Aグループ	Bグループ	Cグループ	Dグループ	Eグループ	Fグループ	Gグループ
自己成長 動機づけ 要因総数 (件)	50	5	26	14	15	0	31
グループ人数(人)	14	1	9	5	8	0	9
一人当りの 動機づけ数 (件/人)	3.6	5.0	2.9	2.8	1.9	0	3.4

【1987年入学生 4年次】

	Aグループ	Bグループ	Cグループ	Dグループ	Eグループ	Fグループ	Gグループ
自己成長 動機づけ 要因総数 (件)	68	4	59	24	48	5	34
グループ人数(人)	15	1	10	5	10	1	9
一人当りの 動機づけ数 (件/人)	4.5	4.0	5.9	4.8	4.8	5.0	3.8

表 8 自分がプラスに変化した事柄【1987年入学生】

	プラスに変化した事柄	3年次 N=46(%)	4年次 N=51(%)
1	大切さ、価値がわかった (自分の行動・周囲の人々・信仰・看護・時間)	11 (23.9)	20 (39.2)
2	物事の大変さを知った	1 ( 2.2)	2 ( 3.9)
3	いろいろな考え方ができるようになった	6 (13.0)	12 (23.5)
4	洞察する態度が身についた	7 (15.2)	6 (11.8)
5	いろいろと興味をもてるようになった	4 ( 8.7)	8 (15.7)
6	将来が具体化した	3 ( 6.5)	8 (15.7)
7	物事をプラスに捉えられるようになった	11 (23.9)	16 (31.4)
8	時間の使い方がうまくなった	3 ( 6.5)	2 ( 3.9)
9	うまく自己コントロールできるようになった	6 (13.0)	5 ( 9.8)
10	強い自分になった	4 ( 8.7)	10 (19.6)
11	自分をそのまま受けとめられるようになった	7 (15.2)	7 (13.7)
12	自分を大切にしようと思えるようになった	3 ( 6.5)	2 ( 3.9)
13	マイペースな自分になった	8 ( 1.4)	3 ( 5.9)
14	ありのままの自分に気づいた	3 ( 6.5)	5 ( 9.8)
15	自信がもてるようになった	7 (15.2)	12 (23.5)
16	自分を出せるようになった	5 (10.9)	4 ( 7.8)
17	自分の気持ちにゆとりがもてるようになった	4 ( 8.7)	4 ( 7.8)
18	他人を受け入れられる態度ができた	7 (15.2)	8 (15.7)
19	人間関係を円滑にできるようになった	1 ( 2.2)	4 ( 7.8)
20	人間関係の難しさを知った	1 ( 2.2)	1 ( 2.0)

表 9 自分がマイナスに変化した事柄【1987年入学生】

	マイナスに変化した事柄	3年次 N=46(%)	4年次 N=51(%)
1	基盤となる考え方がなくなった	1 ( 2.2)	0
2	意欲が減退した	4 ( 8.7)	2 ( 3.9)
3	夢がなくなった	1 ( 2.2)	0
4	余裕がなくなった	2 ( 4.3)	5 ( 9.8)
5	精神状態が不安定になった	3 ( 6.5)	4 ( 7.8)
6	自信が持てなくなった	10 (21.7)	3 ( 5.9)
7	自分を出せなくなった	0	2 ( 3.9)
8	自分を認められなくなった	3 ( 6.5)	0
9	相手の立場にたって考えられなくなった	6 (13.0)	2 ( 3.9)
10	他人に対する許容範囲が狭くなった	2 ( 4.3)	0
11	学校がいやになった	3 ( 6.5)	2 ( 3.9)

うとするが、高くなりすぎると自分の自然な感情を抑圧し、周囲に迎合しようとする傾向が強くなる<sup>3)</sup>といわれている。加藤ら<sup>4)</sup>は、15~19歳の一般女子と看護学生の2つの集団のエゴグラムを比較しているが、その調査でも、看護学生の集団はACがかなり高い結果となっていた。また、安藤ら<sup>5)</sup>は、平均年齢が24.9歳、平均経験年数が3.6歳の看護婦の集団を対象として調査しているが、その研究結果でも看護婦のBurn-Out群は健康群に比べて、ACが有意に高く、自由に自己の感情を表わすことができない傾向にあると述べている。これらは、本研究の1986年入学生の結果と類似しており、協調性と順応性のある程度要求される看護職を目指す集団の傾向と思われた。しかしながら、1987年入学生では、自由な子どもの自我を表わしているFCが最高値をとる者の割合が1年次、4年次共に多かった。また、「基本的構え」、YGテストの型に関しても、入学年度によってかなり異なった傾向を示すことが明らかになった。

## 2. TAOK, 質問紙調査の実施による効果

エゴグラムを用いると、自分の自我状態がどのようになっているかを客観的に知ることができ、「今ここで」の内的自己を予測することで、自分や他人を観察し、自分の変化、活動、成長を促すことに活用できる。他人を分析するのではなく、自らが自己に対する気づきを得て、自己実現能力を尊重し、自己理解を行ない、自分で目標を設定し、それに向けての改善の努力をしていく目標を得ることである<sup>6)</sup>という。従って、学生がエゴグラムを知ることができるTAOKを行なったり、成長の動機づけ、自己変化の内容を記述することは、自分の属するグループや自己

の「基本的構え」のタイプを知るためだけでなく、自分をどう変えたらよいか、自分とどう付き合っていくのがよいかについて、自ら考える機会になると思われる。1986年入学生は1年次と4年次にTAOKや質問紙調査を実施しているのに対し、1987年入学生ではそれらに加えて、カリキュラムが学内の講義や病棟実習から学外実習や卒業論文などの自主性を重んじられる内容に変化する直前の時期である3年次にも同様の調査を行なった。4年次の調査では、1986年入学生は過去に受けたエゴグラムについて、「忘れた」と答えた者の割合が約半数見られたのに対し、1987年入学生では18.8%と少なかった。これは、1986年入学生に比べて、1987年入学生ではより多くの者が、4年次にTAOK及び質問紙調査の結果を思い出し、自己を振り返っているという結果と考えられる。また、1986年入学生の4年次での「忘れた」と答えた者の割合は、1987年入学生の3年次の「忘れた」と答えた者の割合と類似している。これらの結果から、入学年度の異なる集団が持つ特性の影響があるとは思われるが、1986年入学生に対し、より多くの1987年入学生が4年次にエゴグラムの内容を思い出し、自己を振り返ることができたのは、3年次に同様の調査を行なっているからではないかと考えられる。それゆえ、TAOKや質問紙調査を実施することは、自己をふり返り、自己に対する気づきを得る大切な機会を提供することになると考えられる。また、本研究の対象者である学生は「青年期」最後の時期に該当し、加藤<sup>7)</sup>が述べているように、自己の自律を求めて模索する時期を生きる者たちでもある。この時期はまた、自己発見あるいは自我の目覚めの時代と言われ、自律した生き方を求める新しい自己に気づき、これを見つめ育てようとする時期でもある。従って、この時期に、自己を見つめる機会をつくることは、心の健康を保持するうえでも、大切であると考えられる。

### 3. 「基本的構え」と自己成長

#### 1) 自己成長要因の入学年度集団別、学年次別比較

「何が自分の成長の動機になったか」に対する自由記述をまとめると、1986年入学生も1987年入学生も「人との出会い、関わり」が成長の動機づけになったと答えている者が最も多く、対人関係の中で自己が成長していくと考えている者が多いことがわかる。また、1987年入学生の3年次と4年次の自己成長要因の変化を見ると、4年次では学外の人々との出会い、ボランティア、アルバイトなどの対外活動によって、さまざまな角度から自己を振り返るようになり、また、卒業論文をまとめるという自主性を重んじられるできごとを契機として、それまでの4年間の大学生活での経験を自

己の成長に結びつけて考えるようになってくる。加藤<sup>8)</sup>が青年後期では独立性の意識にふさわしい実質的成長が準備されてくるので、自己に自信を持ち、自己受容的になっていくと述べているように、さまざまな角度から自らを振り返る機会となる対外活動の経験や卒業論文をまとめるという自主性を重んじられる経験は、自分に自信を持てるようになる過程、あるいは自己受容ができるようになる過程において、重要な役割を担うと考えられる。

#### 2) 「基本的構え」と自己成長

TAOKの結果、1987年入学生は1986年入学生に比べて、1年次、4年次共に自他肯定のAグループが最も多い。Aグループは基本的に信頼感を自分にも他人にも持つことができ、人生の途中で困難や挫折に出会うことがあっても、自他に対する信頼を失わず、やり通せると思うことが可能であると言われている。4年間の自己成長動機づけ要因の件数と「基本的構え」の変化との関連は、1986年入学生は自他肯定のAグループが、また1987年入学生では自己否定・他者肯定のCグループがそれぞれ成長動機づけ要因数平均値が最も多く、これらのグループに含まれる者は最もさまざまな経験を自己の成長に結びつけて考えていると思われた。また、1987年入学生の3年次の結果は、1986年入学生の4年次と同様に、自他肯定のAグループの成長動機づけ要因平均値が最も高かった。これらの結果をみると、自己を見つめる最初の機会、すなわち1986年入学生では4年次、1987年入学生では3年次において、自他肯定のAグループが最も多くのできごとを成長に結びつけていく傾向が見られた。一方、自己否定・他者肯定のCグループは自己を見つめる機会を得ると、まず自己の「基本的構え」に気づき、3年次から4年次にかけて、自分をどう変えていったらよいかを模索していくのではないかと考えられる。加藤<sup>9)</sup>は青年期の自己批判は、自己との格闘の現われで、理想的自己像へ向かっての努力と密接な関連があることが多い。現在への適応という観点にしばって解釈すれば、確かに不適応の徴候でありうるだろうが、生涯発達という観点に立てば、その評価は違ってくるだろうと述べている。従って、自己を見つめる機会を3年次に得て、その後自己を模索することができる「ゆとり」のある時期、また、学外での自主性を重んじられるさまざまなできごとを経験し、広い視野に立って自己を見つめ他者を見つめるという時期を4年次で持つことが、自己の成長においてとても重要であると考えられる。

### 4. 自己成長要因と自己変化

自己の変化をどのように捉えているのかについて、

1987年入学生の3年次と4年次の自由記述の内容を比較した。その結果によると、この1年間でプラスに変化したことがらの中では、「いろいろな考え方ができるようになった」、「いろいろ興味を持てるようになった」、「強い自分になった」、「自信が持てるようになった」と答えている者が増加していた。これは、これまでの経験を自己の成長に結びつけられるようになり、自己を肯定的に感じられるようになった者が増加していることを示している。この3年次から4年次への自己認識の変化は、まさに、学生ひとりひとりが成長発達過程にあることを示しており、3年次までのさまざまなできごとが4年次において吟味、統合され、自分のものとして受けとめられたものと考えられる。また、主体性を重んじられる実習あるいは卒業論文に取り組むことで、広い視野に立って自己、他者を見つめるようになり、周囲からの評価を受け入れるゆとりが生じ、それが自信となって、自己・他者肯定へとつながるのではないかと考えられた。梶田<sup>10)</sup>は、自分自身を肯定的に見ているか否定的に見ているかは、自他の認識の仕方、または自己をとりまく世界の認識の仕方に大きく影響している。そして、このような自己評価的意識のレベルは、周囲から課せられた課題の遂行をどの程度うまくやれたかという成功、失敗経験によって、また、どの程度周りの人から評価され、承認されたかという承認、否認経験によっても形成されると述べている。本研究においても、3年次にマイナスに変化したことがらとしてあげられている内容は、まさしく周囲から課せられた課題の遂行を失敗したという経験によって生じたもの、すなわち、周囲からの評価が低いと認識したことによって生まれた結果と考えられる。しかし、このようにマイナスに変化したと認識していた者も、4年次には4分の1に減少し、3年次から4年次の1年間で、自他の認識、自己をとりまく世界の

認識に否定的であった者が肯定的に変化してきている。従って、テスト、質問紙調査などの結果をすぐさま、学生またはその集団の評価に結びつけるのではなく、これらの結果は、あくまでも成長発達過程の一部を表わしているに過ぎないという点を念頭に置くことが大切であると考えられる。

## 5. 健康管理のあり方

さらに、本研究の結果から、以下のことが大切であると考えられる。①自己を見つめる機会、自己を振り返る機会を定期的に持ち、今の自分がどのような人間であるか、ありのままを受けとめること、②自分の生き方を模索できる場、ゆとりを感じられる場を持てること、③自主性を重んじられるさまざまな体験ができ、広い視野で自己を見つめる時間を持てることがあげられる。従って、看護学生の健康管理では学生が自己の生き方を模索できるように、また、自己を価値あるものとして捉え、肯定的に受けとめられるように援助することが必要である。そして、何よりも学生が自分自身とうまくつき合っていけるように、支援できる環境を整えることが必須である。学生ひとりひとりの感じ方、考え方を大切に、学生が主体的に自己理解をしようとする姿勢を尊重できる場として健康管理室は位置づけられることが理想的である。

## V. 今後の課題

本研究の結果は、本学1986年入学生と1987年入学生の比較的少ない資料から得られた結果であるので、今後、引続き調査を積み重ね、これらの資料を分析し、自己成長のための気づきを得られる環境作りと自主的に健康行動ができるような動機づけとなりうる健康教育プログラムを開発したいと考えている。

## <引用文献>

- 1) 杉田峰康他：TAOK 活用手引、適性研究センター、1980.
- 2) 桂 戴作他：交流分析入門、チーム医療、pp39, 1984.
- 3) 杉田峰康他：前掲書1)
- 4) 加藤美砂他：エゴグラムによる看護学生の自我状態の一考察、クリニカルスタディ、Vol. 9, No.7, pp679-682, 1988.
- 5) 安森由美、佐伯恵子：看護婦にみられる Burn-Out 現象—エゴグラムとストレス対処方法の特徴—、交流分析研究、Vol13, No1・2, pp53-59, 1988.
- 6) 飯田澄美子他編：養護教諭実践講座 第3巻 ヘルスカウンセリングの実践、ニチブン、pp141-152, 1991.
- 7) 加藤隆勝：青年期の意識構造、誠信書房、P57, 1987.
- 8) 加藤隆勝：前掲書7), pp159-160.
- 9) 加藤隆勝：前掲書7), pp117-118.
- 10) 梶田叡一：自我意識の心理学、東京大学出版会、pp101-103, 1988.

(受理日：1992年11月30日)

A Study on Health Administration for Nursing Students  
at St. Luke's College of Nursing  
— On a point of self-Growth —

HISAKO NAKAYAMA, SUMIKO IIDA

【Summary】

The relationship between self-growth during school life of nursing college and results of the TAOK and Yatabe-Gilford Test (YG test) of students of 1986 and 1987 was examined.

It was to clarify the effects of what was programed for the students: an orientation at the time of entrance, a personality test and a personal interview on self-growth. The same examination was also performed at the third-year for the students of 1987 to reveal the effects of things said above.

The results are as follows:

1. The results of the TAOK (Egogram and 'Basic Position') and the YG test reflected the feature of an examined group.
2. This examination conducted during the third-year provided students with the chance to find themselves.
3. It is found that comparing with the students of 1986, the students of 1987 more recognized the activities outside college and the writing of a graduation thesis as the factors influencing their own self-growth.
4. The number of the students of 1987 who think the activities outside college and the experiences in their forth-year through whole college life as a primary factor that influenced their own self-growth is twice as many as those who think so in their third-year.
5. The ratio of students who connect one's experience to one's self-growth is highest in each of the following groups: the students of 1986 in the forth-year whose basic position is that 'I am OK, You are OK'; the students of 1987 in the third-year whose basic position is that 'I am OK, You are OK'; the students of 1987 in the forth-year whose basic position is that 'I am not OK, You are OK'.
6. The number of students of 1987 who answered to the question about their positive change that they have become able to view things from various angles increases in the forth-year twice as many as in the third-year.

Key Words

Small Group Education  
Health Administration  
Mental Health  
Transactional Analysis  
Adolescence  
Self-Growth